



第9号

編集発行

園田学園女子大学

シニア専修コース

「けやき便り」編集クラブ



「生きる力」

学校法人園田学園

理事長 一谷 宣宏

この度、大学が開学 50 周年を迎えることが出来ました。シニア専修コースの皆さんにこの事をご報告できる機会を得ました事を大変嬉しく、有り難く思っております。今日ここに幾多の困難を乗り越え、半世紀を刻むことが出来ましたのも、地域社会の皆様や同窓生からの温かいご支援とご協力のおかげであります。この大きな節目を機に、皆様の期待に応えて、建学の精神「捨我精進」のもと、気持ちを新たにして全力を尽くしてまいります。シニア専修生の皆さんの一層の叱咤激励を以て更なる発展を期するところであります。

さてシニア専修生の皆様には、入学式、卒業式以外、直接に接する機会がなく少々寂しく思っているところでありましたが、この様にシニア専修コース「けやき便り」に登場させて頂き有り難うございます。せっかく頂いたこの機会に一言お話をさせていただきます。

生きがいを感じ、どのように切り開いていくかは、人間のみが持つ一つの特権といえます。自己の命を真に愛し、さらにそれを正しく訓練して、豊かにたくましい心情にしていく、それこそ真の自己教育であり、他の人を考える心もそこから自然に生じるのではないのでしょうか。

古い話で恐縮ですが、私の祖父は亡くなる数か月前、父に満面の笑みをたたえながら、「わしが、八十三歳までも長生きができてるのは、動物好きであったからだ」とつやつやした顔で元気よく話しかけたそうである。その動物好きの長生きの法というのは、つぎのようなことである。祖父は、隠居した昭和26、7年のころから五十羽の鶏を飼い、それを毎日楽しみにしていたそうである。ある日ふと、五十羽の鶏に、たとえ一日でもよいから一日に五十個の卵を産ませたいという欲望がでてきたそうである。その日から鶏の飼育について、老人らしい執念で研究に心魂を傾けた。毎日産卵記録の更新を楽しみながら、鶏をこよなく愛し、一日に四十五個の産卵記録をあげた。そのときには、心はずみ、子どものように翌日の朝を待った。そうしてついに四十九個まで生ませた。それから最後の一個を生ませべく、五十個、五十個と念じつつ、最後の一個に生きがいを求めて努力を続けているうちに八十三歳になっていた。思えば、祖父の晩年は、一個の卵に生きがいを覚えていたように思える。この話は、私が中学生時代（昭和33年頃）に父が話していたのを面白く聞いたものでありました。「生きる力」正に生涯学習とはその事に尽きるとは思いませんか。これからも笑顔で頑張らしましょう。

目 次

「生きる力」	一谷 宣宏 理事長	P1
創立50周年によせて	総合生涯学習センター 榊井かず美	P3
第50回けやき祭	研究生 中村米三郎	P4
神戸でインドを体験する	国際3年 今池 純江	P6
新入生歓迎会を振り返って	国際2年 川野 淳一	P8
文学歴史学科1回生懇親会を実施	文歴1年 三瀬 裕一	P9
漱石の高等遊民、そして今を考える	文歴3年 田畑 正信	P10
秋の賀茂社を訪ねて	研究生 水原 剛	P11
法隆寺の思い出	文歴2年 橋本 秀明	P12
フレンドシップ フォース活動に参加	国際1年 福原 宏章	P13
SACC オートキャンプは素晴らしい	国際1年 楊 錦華	P15
暗記がもたらした実り	文歴1年 相田 晴夫	P17
「会社人」から「自由人」	情報1年 徳田 將之	P18
グランフロント大阪を訪ねて	研究生 水原 剛	P19
「山上の聖地」	研究生 萩原 善恵	P20
私と山	研究生 小西 温代	P21
マチュピチュ発見100年「インカ帝国展」を鑑賞して	研究生 遠藤 明	P22
センターからのお知らせ	総合生涯学習センター	P27
「けやき便り」の投稿について	けやき便り編集クラブ	P28
編集後記	けやき便り編集クラブ	P29

創立50周年によせて

総合生涯学習センター 榊井 かず美

今年10月1日に本学は創立50周年を迎えました。尼崎で女子大学として50年。素晴らしいことです。ひとえに多くの方々のおかげで今に至っていると思います。

そこで、私の知る歴史を、恐縮ですが私事も含めて少し振り返ってみたいと思います。

まず創立20周年のとき、私は本学文学部国文学科の学生でした。昔の宝塚大劇場で記念式典が開催され、「学生歌」を作詞・作曲した学生が表彰されたり、宝塚歌劇を観劇させていただいたりしました。

その後の昭和60年に今の図書館が建ち、2号館から移転しました。目録などの機械化が始まり、当時としては素晴らしいもので、私はその図書館に配属されました。

30周年記念の年（平成7年）には、阪神淡路大震災で大学もたいへんな被害に遭い、図書館では全ての書架が倒れて約20万冊の図書資料が散乱し、さらに空調機器の破損で館内が水浸しになりました。床に落ちて水を吸って膨らんだり黴びたりして、「本」として利用できなくなったものを何万冊も廃棄処分しなければなりませんでした。書架を修理し、図書を一から並べ直し、全館復旧までには約2年を要したと思います。現在生協の売店や食堂がある30周年記念館は、震災当時建設途中でしたが10月には無事完成しました。

その後、私は学生支援部（当時）で教務の仕事に携わり、そして平成23年度から総合生涯学習センターでシニア専修コースや公開講座のみなさまと接する機会を得たのです。

シニア専修コースは平成14年度からですが、公開講座は30年以上前から脈々と続いています。今や、シニア専修コースやテニスカレッジを含めて生涯学習で本学に来てくださる地域のみなさまは毎年1,000人以上で、中には10年以上も続けて来てくださっている方もいらっしゃ

います。大学や短大の卒業生のように数えることは難しいのですが、みなさまのことも園田ファミリーと言えるのではないのでしょうか。生涯学習の沿革は総合生涯学習センターのホームページに載せているのでご覧いただきたいのですが、長く受講してくださっている方は、事務所の移転や田辺所長・松成所長をはじめとする所長・講師・スタッフの交代の歴史もよくご存じで、私を含めた現在のスタッフが知らないことをいろいろ教えてください。そうこうしているうちに園田学園の生涯学習事業は来年35周年を迎えます。次は「生涯学習50周年」というお祝いができればよいなと思っています。事務所やスタッフが替わることがあっても、どうぞみなさま、園田学園女子大学の生涯学習講座をよろしくお願い申し上げます。

最後に、創立50周年のこの記念すべき年に、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」として本学のプログラムが採択されました。このことに関連しても、総合生涯学習センターは、今後も地域連携や地域貢献の一つとしてより多くの方々に受講していただき、園田を好きになっていただけるようなことを考えていきたいと思っています。

重ねてみなさまのご理解とご協力をお願い申し上げます。



50周年ロゴ



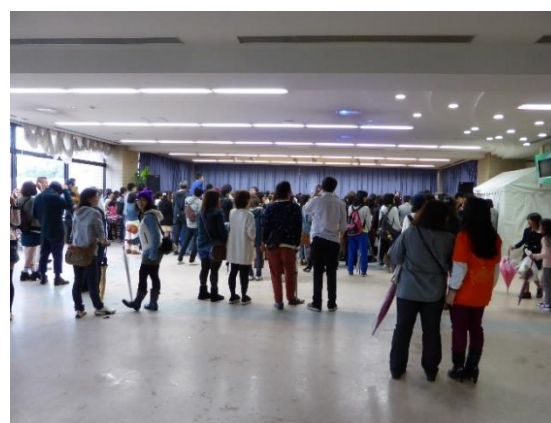
残念なことに、19日は小雨、20日は雨と天候には恵まれなかったが、園田学園女子大学の学生さんの「若さ」が満ちあふれていた素晴らしい学園祭であった。



グラウンドには、売店が並び
学生さんの元気なかけ声が響く



19日は、この舞台上で若者たちの多彩なパフォーマンスがあった…



20日は、雨のため舞台は開花亭に移ったが、学生さんの「若さ」は全開！！



日ごろ見慣れた総合生涯学習センター
事務所前も、変身！！

この学園祭に、シニア専修コースからは、「けやきコーラス」と「けやき写真倶楽部」が参加した。

「けやきコーラス」は20日12時45分から1号館4階講堂の聴衆を若々しい歌声で魅了。



「花のまわりで」

江間 章子詞、大津 三郎曲

「大好きな日曜日」

石井 克子詞・曲

「二度とない人生だから」

坂村 真民詞、鈴木 憲夫曲

「野にさく花のように」

杉山 政美詞、小林 亜星曲

「ほほえみ」

小田切 清光詞、鈴木 憲夫曲

「花は咲く」

岩井 俊二詞、菅野よう子曲

以上「けやきコーラス」唄

「波浮の港」

野口 雨情詞、中山 晋平曲

田井先生（指揮者）唄

「赤とんぼ」など

三木 露風詞、山田 耕筈曲

ゲスト山崎様（ソプラノで活動中）唄



「けやき写真倶楽部」は2回目の参加で、1回目から大学写真部との共同開催であり、「けやき祭」唯一の現役学生とシニア専修コース生の合同写真展であった。



笑い声が絶えなかった写真倶楽部のコーナー



ホームレス芸人小谷さんと一緒に撮影して
ご機嫌なNさん（撮影者は木村部長）

撮影した写真は、すぐにプリントして、コメントとともに掲示。当然、協力して頂いた方には、写真をプレゼント。



神戸でインドを体験する

「国際文化演習2（河合教授）」
フィールドワークより

国際文化学科3年 今池 純江

「国際文化演習2」では、授業の一環として、毎年フィールドワークに出かけています。今年は、6月9日（日）「神戸のインドを巡る」として現地訪問を、10月13日（日）の「インドの祭典インディア・メーラー2013を見学する」に参加しました。

1. 神戸のインドを巡る 6月9日(日)

10時30分、阪急春日野道駅に集合。参加者は河合先生と受講生5名です。

目的は、授業で下調べをしてあったシク教寺院、ジャイナ教寺院、インド料理食材店を巡ることでした。シク教寺院を見学した後、インド料理店で昼食をとったのですが、そこで河合先生の旧知の方で、元園田学園女子大学教授で言語学者の内田先生とそのお嬢さんと合流し、案内していただきました。三宮のインド料理店では、内田先生、お嬢さんに料理のことをいろいろ教わりながら楽しい時間を過ごしました。

今回のハイライトは、神戸市内にある内田先生のご自宅での食事にご招待していただいたことです。内田先生の奥様はインドの方と聞いていましたので、お料理を教えて頂けるかしら、もしかしたらサリーも見せて頂けるかしら、インドのお話をいろいろ聞かせて頂きたいなどと考え、ワクワクしながら当日を迎えました。

まず、シク教寺院では、快く見学を承諾していただきました。礼拝に参加しましたが、シク教のルールにより、頭に布（インド人男性の場合はターバンにあたる）を被る必要がありました。ハルモニウム（アコーディオンのような楽器）を弾きながら歌う、太鼓のリズムと調和したお経による祈祷。独特の場を体験させていただきました。



昼食後、神戸北野の異人館街の中にあるジャイナ教寺院に行きました。扉を叩いても応答がないので、電話して連絡をとると、担当者が出てくれたので、フィールドワークの趣旨を河合先生が英語で話されて中に入れていただきました。建物は、外観と内部が全て大理石で造られており、素晴らしい寺院でした。そのためか、玄関で靴を脱いで、寺院の中に入りました。礼拝所は2階にあり、祭壇と祖師像だけのシンプルな空間でした。ただ、殺生が完全に禁止されている宗教であるため、祭壇の側に、虫を殺さないための羽簾があり、改めてジャイナ教の教義の徹底さを知ることになりました。



次は、近くにあるインド料理食材店に行きました。今日の目的を忘れてしまい、自分の買いたい食材を探すことに時間を費やしてしまった自分に気付き愕然。なお、この食材店は、NHK 6月20日の「あさイチ」で紹介されました。



午後4時ごろになり、神戸市営地下鉄に乗って内田先生宅に向かいました。

先生宅で内田先生が編集された超専門的なタミル語→英語辞典を見せていただきびっくり。松隈さんと私は、サリーを着せていただきました。6mもの布をたった1本の紐で縛り着付けるサリー姿で写真のモデルに…？（このサリーは正装用です）

そして、今日最大のイベント、すでに出来上がっていた奥様手作りのインドの家庭料理（チキンカレー、豆カレー、ライッタ等）の夕食をご馳走になりました。



終日、インドを楽しく体験した有意義な1日でした。先生方、お嬢様、奥様、皆さん有り難うございました。

2. インディア・メーラー2013を見学する 10月13日(日)

関西日印文化協会のホームページに紹介されていた「インディア・メーラー」に「国際文化演習2」の受講生3人で出かけました。パンフレットには「関西では最大級のインドフェスティバル。食や文化を通してイン



ドと日本の友好を深める異国情緒溢れるとても楽しいイベント」とあったので、楽しみにして会場がある神戸メリケンパークまで足どりが軽かったのは言うまでもありません。

会場に入ると、秋晴れの澄み渡った青空のもと、ステージで演奏されていたインド音楽の音色、立ち並ぶインド料理店の屋台、そこから漂ってくるカレーやタンドリーチキンのいい香り、まさにインドに迷い込んだような気がしま

した。

一緒に行った仲間が500円で買ったカレーを食べさせてもらいました。ナンは少し甘くカレーもそれほど辛くはなく食べやすいカレーでした。瓶入りのミックスジュースを飲みましたが甘味が強いジュースでした。



料理の出店の他にインドの雑貨、アクセサリー、サリー、カレーレトルト、マサラ（香辛料）、ビール、ワイン、バイク、自動車（3輪幌付き、ドアなし、日本では単車扱いになる）等のブースもありました。どんなものが販売されているか興味津々で、お店を覗きました。

また、お店の人と話したり、領事館のブースでは、香辛料について尋ねたり、カレーを食べていたインドの人に話しかけたりと楽しい時間でした。



来場者も多く賑やかでしたが、インドというお国柄でしょうか、のんびり時間が流れているように感じました。サリーの着付け、お茶会（チャイ）などの体験コーナーの場所を尋ねた時も「場所は始まる前に木陰などを探して良い場所にする」との事で少し驚きましたが、これもインド流なのかとも思い楽しい気持ちになりました。ゆったりと、楽しい時間を過ごし、名残惜しかったのですが、会場を後にしました。

新入生歓迎会を振り返って

国際文化学科2年 川野 淳一

去る4月12日、期待と不安を抱えつつも胸わくわく躍らせながら園田学園の正門をくぐられたあの日から、早や3ヶ月が経過いたしました。

数十年振りの学生生活に想いを馳せておられる方、新たな仲間作りに精を出されておられる方、文化人類学と言う新しいテーマに挑戦されておられる方、また今一つ学園生活の雰囲気馴染んでおられない方等々、いろいろな方々がおられると思います。

振り返ってみますに、私自身も一年前、「新たな挑戦を」と胸わくわくしつつ、この園田学園の正門をくぐり、昨年の新人歓迎会に臨んだ訳ではありますが、当時誰一人として知り合いもおらず、取り敢えず隣の人と挨拶を交わした程度で、その後の学園生活にかなり不安を感じていましたが、全くの取越し苦労でした。

考え抜いたすえに入学した国際文化学科。生まれて初めて習う文化人類学の授業も先生の熱意のこもった楽しい指導に徐々に興味を持つようになり、今では特にアジア太平洋地区の知識が知らず知らずのうちに蓄積されているように思います。



また、人とかかわりに関しても時間が経つにつれお互いに話し合うようになり、授業や校外学習（リトルワールドへの研修旅行）・忘年会

（新年会）および仲間内での一泊旅行など、色々な機会を通してより多くの人達とのコミュニケーションが図れることとなりました。

歓迎会当日は、1年生の午後の授業が急遽休講となり本当に集まってくれるのかと気をもんでおりましたが、幸いにも全員出席され、司会者の号令でスタートが切られました。

「先生方のご挨拶」～懇親～「先輩からの激励の言葉」～懇親～「新入生からのお礼」と続き、最後には素人マジックが登場、失敗は成功の元の諺通り、笑いを誘いつつも最終的に見事に完成させられ、本当に楽しい2時間を過ごさせていただきました。



学園生活にも授業にもまた人間関係にもほぼ慣れられてきた時期かと思われま

す。これからは各人がおのおの目指してこられた入学目的の100%達成に向け、焦ることなくマイペースで掴み取っていった欲しいと思っております。



最後に、残り2年半におよぶ園田学園での学生生活が、楽しくもあり有意義な人生の一コマとなりますよう、入学時の気持ち（初心）を忘れず、「自分の夢実現」に向け精一杯努力されますこと切に願っております。

（写真 村井様撮影分より）

「文学歴史学科1回生懇親会」を実施

文学歴史学科1年 三瀬 裕一

10月16日(水)午後12時10分より「チャティー」で初めての懇親会を実施しました。当日は歴史担当の大江先生にもご出席をいただきクラス25名全員参加の盛り上がりです。初めに大江先生にご挨拶を頂戴し、今後の学生生活への動機づけをいただきました。



お腹もすいているとのことでまずは食事の開始です。チャティー名物の「おでん等」をつまみながら、楽しく談笑をはじめました。抽選による席、ということもあり日頃あまり会話の機会がない人とも話がはずみます。



お腹も少しふくれたところで自己紹介。一人一分の予定ですが、教室での無口と正反対に長い自己アピールが続きます。各人の今までの人生の一端を吐露していただくスピーチは25人分の感動です。既に顔写真入りの名簿も作成してあったので、殆どどの人の名前、顔、並びに個性を知ることができました。その後はより親しくなり談笑に花が咲きます。



予定の約2時間を30分以上オーバーし、最後に全員で記念撮影です。次回の「懇親会」の早期実施を確認し、楽しい懇親会を終了しました。個性あふれるクラス員と今後も楽しい学生生活の確認ができた「懇親会」でした。

文責 三瀬 裕一 (写真 青木様撮影分より)



漱石の「高等遊民」、そしていまを考える

文学歴史学科 3年 田畑 正信

1、はじめに

縁あって吉村先生の「日本文学Ⅲ」夏目漱石の講座を受講しています。漱石をとおして明治の歴史を学ぼうと思ったからです。さいわい先生の適切な作品紹介、わかりやすい講義が、私にとって学ぶこと、うなずけることが多いです。しかし時には「ちょっとちゃうなあ」と感じたりして、とにかく楽しく学んでいます。



「日本文学Ⅲ」10月16日の講義より

夏目漱石の作品は中学・高校時代にいくつか読みましたが、受講を機会に、いまあらためて読みなおしています。若いときはよくわからなかった『草枕』や『吾輩は猫である』は、いまになって感動できたし、若いときに感動した『こころ』や『三四郎』は、いまになってはバカらしく思うなど、年齢を重ねたために、作品のとらえ方が大きく変わっていることを実感しています。

私は、漱石を読みなおして、「高等遊民」とは何かを考えました。同学の士である研究生の木下さんからの強力な要請もあり、無知と無恥をかえりみず、その気になってしまい、私の愚考を書いてみることにしました。

最後までおつきあい下さいますよう、お願い申し上げます。

2、「高等遊民」とは何か

『広辞苑』によると「高等遊民」とは、「職業もなく遊んでくらしている人」とありました。もともと「遊民」とは「のらくらもの」「ヤク

ザもの」のたぐいでしょう。著名なアメリカ人で日本文学研究者のドナルド・キーン氏は、漱石作品に登場する「高等遊民」について、「両親や遺産に恵まれ、のうのうたる暮らしがいつまでたってもつづいて当然と思っている。独力で生きねばならぬ必要に迫られると、絶望し、発狂さえしかねない」と、あきれはてています。だから、普通なら誰も相手にしないが、たまたま高学歴があるから、人なみにあつかってもらっているだけという者たちです。漱石の作品、とりわけ『それから』とか、『こころ』などに出てくる主人公は、この「高等遊民」たちでその夫婦は、「職業もなく遊んでくらしている」ことさえ、何にも思わない、実に生活感覚のない、したがって存在そのものさえ、社会的にきびしく問われなければならない人種なのです。

3、「遊んで暮らせる」人とは、どんな人たちか

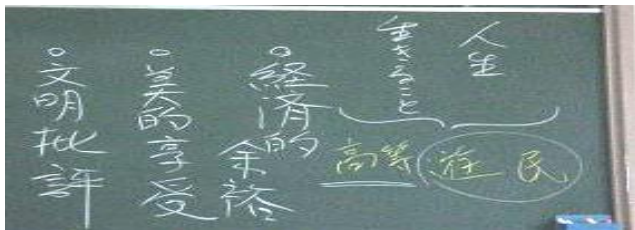
では、「高等遊民」は、どうして生まれたのでしょうか。私は、その発生原因の一つに戦前社会の前近代的な地主制度があると思います。明治初期の廃藩置県と地租改定で庄屋など豪・富農が地主として農地を集積し、より大きな力を持つようになりました。一般的に、西日本の地主は、小作人を働かせて得た収益を、金融業や酒造業、あるいは株式などに投資して、さらにもうけを増やしていきました。一方、東日本では冷害・干ばつなど不作で没落する小農・中農から農地を買いあさって、なかには「千町歩地主」にまでなる者もあらわれました。資本家と労働者、地主と農民、これらが戦前社会の4大階級を構成したといわれています。また、「明治40年ごろの（旧制）高等学校進学人口は大目にみても同年齢の1%にすぎない」といわれています。

結局、「高等遊民」として「職業もなく遊んでくらしている人」たちは、この地主・豪農か、蔵元や網元、大商人・大店、旧上級武士（＝大半は国や地方の官僚）など恵まれた子弟ということになります。

4、「高等遊民」の終焉といまのご時世

明治から大正、そして敗戦まで、産業構造が劇的に変化し、軍国主義が跳梁して、国民すべてを戦争に巻き込むだけでなく、朝鮮や中国、東南アジアの人々にまで、ばく大な被害と惨禍をもたらしました。その過程で若者は、学業半ばで軍需産業に引っぱり出され戦場に狩り出されていきました。こうした時代には「高等遊民」はほとんど存在できなかったのではないのでしょうか。そして「高等遊民」消滅が決定的となったのは、戦後の農地解放だったのではないかと思います。

以来、戦後70年近くとなった今日、「高等遊民」は遠い過去のものとなり、「大学は出ても非正規雇用」が多数となり、正社員になったとしても若者使い捨てのブラック企業がはびこり、精神と肉体をバラバラにされて退社を余儀なくされるか、そうでない企業だとしてもリストラ、倒産・合併、首切り、強制配転はいまや日常茶飯事となっています。そんなとんでもないご時世に、「職業もなく遊んでくらしめている人」ばかりか、まともな「職業人」「正社員サラリーマン」の存在ですら、許されない事態になってきているのではないかと。生きること、働くこと、平和であることが難しい時代になってきた、そんなことを考えてしまう、今日この頃です。ありがとうございました。



「日本文学Ⅲ」10月16日の講義より

<参考文献>

ドナルド・キーン著

『日本文学史 近代・現代篇2』（中公文庫）

五味文彦・野呂肖古編著

『ちょっとまじめな日本史・下』（山川出版社）

竹内洋著

『立身出世と日本人』（NHK人間大学テキスト）

「秋の賀茂社を訪ねて」

研究生 水原 剛

10月19日文歴9期の歴史散歩、今回は上賀茂神社から下鴨神社までのコースに、昨夜来の雨にもかかわらず12名の参加で賑やかにスタートです。

四条烏丸に集合したところにはほとんど雨も上がり、それからは暑くも寒くも日焼けすることもなく絶好のお天気となりました。

平成27年度に式年遷宮を迎える上賀茂神社は落ち着いた雰囲気、途中の社家の町並みも独特の風情でともに再訪したくなるスポットです。大田神社、深泥池、下鴨神社、河合神社まで、芸能の神様やサッカーの神様に縁結びの神様もあり、参加の皆様も各所のお参りに忙しそうでしたが、後半には栗のデザートにチョコレート差し入れもあり、周りの雰囲気と小川のせせらぎにほっこりとした時間が過ぎていきました。ここで早くも次回の企画案内書とともに忘年会の話題まで、そういえばもう1ヶ月ちょっとで師走、忘年会の話題も納得です。

そのあとは恒例？の反省会が新京極のお店で開催され、文学や歴史の話題とともに最近の世界情勢の話でも盛り上がりましたが、一番の心残りは昼食会の明るい雰囲気での賑やかさに比べ、新京極とは思えない落差の大きい「質素すぎた反省会」への反省でした。



（上賀茂神社にて）

法隆寺の思い出

文学歴史科2年 橋本 秀明

この稿を思いついたのは、松山先生「日本の風土と文化」の授業から。自宅で和辻哲郎『風土』を探していると、同『古寺巡礼』・梅原猛『隠された十字架』・亀井勝一郎『大和古寺風物誌』・上原和『斑鳩の白い道のうえに』が出てきて、若い頃を思い出したことによる。

筆者が初めて法隆寺を訪れたのは40数年前、きっかけは1枚の写真。カラーブック文庫『仏像』（保育社）の最初の頁に“救世観音”。文庫は手許にないが、黄金色に輝いた余りの美しさか畏怖なのか一瞬顔から血が引く思いをしたことだけは、今でも忘れられない。

“救世観音”は、当時4月特定期間の特別公開。東院伽藍の夢殿で拝礼しお顔を拝見したが何か遠くて印象に残らなかったように思う。

2年前の秋の公開時、再度訪れ、目の前で拝見できた感があり、とはいえ写真のようではなく、くすんだ色だったのを憶えている。

“百済観音”についても少し。昭和18年発行の『大和古寺風物誌』に掲載された写真は、当時は触れるぐらいの所に置かれていたようである。40数年前拝見したときは、他の仏像とともに大きなガラス張りの囲いの中に置かれていて何か悲しい気持ちになったように思う。2年前は驚き。“百済観音”だけの大きな部屋があり一体透明な囲いの中に。

筆者にとって特別な仏像ではあるが、嬉しいような寂しいような。

法隆寺の七不思議はご存じだろうか。この寺に限らず大きな神社仏閣にもあるようだが。

その中から一つ紹介。五重の塔の相輪(九輪)に4本の大鎌が風鐸の間に差し込まれている。現在の大鎌は、堺市「水野鍛錬所」で昭和27年の製作。魔除けとも地震除けとも云われ、鎌倉時代から続いているとのこと。目視出来るから、法隆寺に行く機会があれば是非ご覧になってください。

本について補足。

『大和古寺風物誌』・『斑鳩の白い道のうえに』は、平成11年に逝去された作家 辻邦生の本を古書店・古本市で漁っていたときに見つけたものである。

『斑鳩の白い道のうえに』は昭和50年発行。ベストセラーとなった昭和47年発行の『隠された十字架』の批判のための出版と新聞で知って、読みたいと思っているうち忘れ、偶然にも発見。

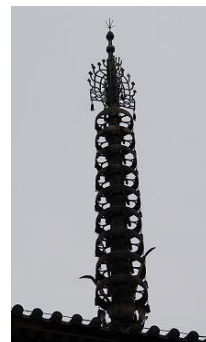
『大和古寺風物誌』は懐かしい本で、昭和40年に著者の全5冊著作集が出版され即購入。一番最初に読んだことを憶えている。著作集は手放し、残っているのは旺文社文庫だけ。

辻邦生の本は若い頃から読んでいたが、すべて手放した。逝去された後改めて読もうと思い、古書店・古本市巡り。入手したのは30数冊。最近は殆ど読まず。

以上、思いのまま記す。



法隆寺五重の塔 平成25年10月1日撮影



法隆寺五重の塔相輪の鎌

フレンドシップ フォース活動に参加

国際文化学科1年 福原 宏章

いきなり「フレンドシップ フォース」と言っても何のこっちゃとなりますので、これについてご説明します。

1977年に当時のカーター米国大統領が提案され始めた活動で、その目的は「ホームステイ」を通じて、お互いの国の文化の違いや考え方を理解し、友情を深めて世界の平和に貢献していこう！というものです。その国際本部は、米国ジョージア州アトランタにあり、現在61ヶ国、400余のクラブが参加する組織です。これらの会員はどんな宗教や政治団体とも無関係です。

関西では1995年から「フレンドシップ フォース大阪クラブ」として、年に1〜2回（1週間単位）のホームステイの渡航と受け入れの活動を行なっています。会員が74名おり、運営は全員のボランティアによって支えられています。これまでの交換した相手は、アメリカ・カナダ・オーストラリア・ドイツ・ベルギー・チェコ・オランダ・イギリス・ハンガリー・トルコ・タイなど17ヶ国に及んでいます。渡航や受け入れは、その国の人々と友達になるためで、観光や営利が目的ではありません。そのためホームステイ中は個人の責任で行動し、クラブ同士の交換行事には団体行動で参加することになります。観光旅行にない忘れられない素晴らしい経験になります。これにより外国に一生続く友人を持つことができます。英語が共通語になりますが、片言でもOKです。少しでも話をして理解しようという気持ちと勇氣さえあれば、相手も一生懸命に理解しようとしてくれます。

私もまだ入会して4年足らずですが、既にオーストラリアのケアンズ・ノースノートン、アメリカのテキサス州サンアントニオ、フロリダ州オーランドと今年は8月16日からインドネシアのジャカルタに渡航しました。本当にいい経験になりました。今でもお互いの家族のことなど情報交換をして友情を育んでいます。

この園田学園在学中の今回の内容ですが、家内と一緒に（いつもですが・・・）です。我々を受け入れてくれたホストはイスラム教徒の産科・婦人科のドクターで奥様と1男1女がおり、我々の到着2週間前に、生後3日の乳児を養女として迎えられた家庭です。イスラム圏では富める者は、そうでない者に布施を施すのは当然とされています。

行く前には食事の内容や好きな晩酌ができるのかが心配でしたが、なんとかクリアできました。

2日目が当国の独立記念日で、現地の高校に案内され祝賀行事に参加。若い学生たちの規律正しく、愛国心あるその姿に感激しました。この日は街中が国旗（上半分が赤・下半分が白のデザイン）でいっぱい。



その夜は、Yayu 夫人の父君の78歳の誕生日ということで、我々夫婦も含めて家族全員でご実家に招待されました。20人以上の親族が集まってお祝いをしました。

お国のご馳走をいただき万国共通の「ハッピーバースディ」を合唱し、父君がケーキカット。この時に父君から私に缶ビールが手渡され「私のために飲んでくれ」と言われる。冷蔵庫で冷やされたものでなく常温のビールです。誰も飲まない中で一人飲みました。こちらでは、わざわざ冷やさないんですね。父君が40年ほど前に技術者として東京で研修を受けておられ、奥様

も半年ほど来られていたので、とても親日派でした。鎌倉・日光いろは坂などの地名や東京は物価が高くて苦勞した、ともお話されました。参列したみんなで幼い養女をあやしたり、抱っこして、彼女が家族の一員であり、大切にされていることが覗えました。

18日はジャカルタ県庁で、弱冠47歳のBASIKI（中国系インドネシア人）副知事との名刺と意見交換も実現できました。彼は緊急の国内問題として、公務員の賄賂強要をなくすこと・交通環境整備の早期解決・貧富の格差是正の必要性和日本への更なる協力要請などと政財界人並みのお話をされました。

歓迎会や返礼会は公式行事ですが、ホストの家族との歓談や相互の文化交流が最も楽しいのです。こちらからは家内が「お好み焼き」、本当は豚玉がおいしいのですが、イスラム教徒は豚を食べないので、鶏肉玉子入りを作らなければならなかったのです。しかし「おいしい・おいしい」とリクエストが続出。ご夫妻にお土産として持参してきた浴衣を「着付け」してあげたらお二人が歓声を上げて喜ばれました。旦那のYAYIさんは「サムライ！ニンジャ！」と叫びます。



私は日本文化の伝承の一部として持参してきた、太字用の毛筆・墨汁・半紙と相手先の古新聞を敷いて「お習字」を伝授。漢字は難しいので「ひらがな」で一人一人の名前が書けるように自らお手本を書いてあげ、筆順とその文字の特徴・ポイントを教えて特訓しました。本当に

上手に書けるようになってくれました。皆さん日本に対して何事にも興味深く、真剣に受け止めてくれます。伝える立場のこちらも嬉しくなってきます。

ご婦人達はテレサ・テンさんの唄が好きなこと。子供たちはここでもゲームとアニメに没頭していることも知りました。やっぱり主婦層の女性は、東洋人同士で哀愁が分かり合えるのでしょうか。

返礼会の折に、在インドネシア日本総領事館の一等書記官である南哲人氏が急遽駆けつけてくださり、「日本とインドネシアの民間人同士がこのような親善交流されているお姿を拝見し感動しました。是非、末永く継続してってください。ご健闘をお祈りします」との旨のご挨拶がありました。彼は福岡県出身で、文部科学省からの出向で赴任されています。彼も阪神タイガースのファンで、我々男性一同による「六甲おろし」を一緒に合唱してくれました。

最後は日本人全員で大阪名物「河内音頭」を踊り始めるとインドネシアの人たちも入ってきて、身振り・手真似で踊りだし、雰囲気は最高潮に達しました。

こんな異なる民族同士が損得抜きで、純粋な心で同じ時間を共有できるなんて、なんと幸せなことでしょう。

因みに申し上げますが、渡航した日本人メンバーを「アンバサダー」（大使）と呼びます。

日本では異常猛暑らしかったのに赤道直下のインドネシアで涼しい夏を楽しく、有効に（友好に）過ごせることができました。

この文章をお読みくださった貴方も市民・民間レベルで国際交流ができますよ、ということをお伝えさせていただくことができました。

まだまだ書きたいのですが今回はこのへんで
・・・・・・・・。

拝

SACC オートキャンプは素晴らしい 国際文化学科1年 楊 錦華

SACC とはシニア・オートキャンピング・クラブの略称で、会員資格は50歳以上のオトナ、事務局を置くが会則なしの気ままなグループである。夫婦会員がたてまえで、入会して20年になる。

活動は年6回のキャンプ例会を輪番制で催行し、今年の7月は当番幹事に当たった。キャンプの合間に何をするかは全て幹事の一言に委ねられており、過去には何もしない、カラオケ、輪投げ、スイカ割り、山菜採り、フラダンス、ペタンク、グランドゴルフなどを楽しんだ。

今回は吉野川の大歩危でラフティングすることになり、キャンプサイトは最寄の「ゆとりすとパークおおとよ」（高知県）を選んだ。

26日(金)、この日は国際1年の必修科目の補講が入っていたがキャンプを優先した。正午、道の駅・大杉で全員合流し、いよいよ目的の「ゆとりすとパーク」へ向かう。パークは広大で、コテージ・ログハウス、フラワーガーデン、キッズトレインなどの各施設が標高600mの山の肩あたり一帯に点在し、尾根には大きな風車が2機ゆったりと回っていた。キャンプ場では大小さまざまなサイトが斜面に沿って段々に作られており、利用者が少ないらしく芝の状態は申し分なかった。トイレ棟に近い広めのサイトを選び、いつものように設営にかかる。早い時間に着いたのでまさに「ゆとりすと」の名の通り、とろりとした時間を過ごした。霧の発生で涼し



くなり、はるか先の山並みに沈む夕陽の眺めは印象的だった。

4組共同で1つの食事棟（タープ）を張り、夜の献立・串カツにかかる。アスパラ、うずら、えび、しいたけ、しし唐、玉葱、チーズ巻き、茄子、山芋、、、そして忘れられないのが前菜のこんにやくカルパッチョ。何と多彩で贅沢な、こんなメニューは素晴らしい。図らずも今日はYKの誕生日。みんなでハッピーバースディを歌い、ありあわせのレーニア・チェリーで祝って乾杯した。彼女のあふれる笑顔が素晴らしい。

翌27日9時、リバーラン・プラス社の大歩危ベースで手続きを済ませ、小太りのパパサングイド（バタヤン）と真っ黒に日焼けした女性ガイド（トミー）が手際よくラフティング全体の流れを説明した。私たちはウェットスーツ、スプラッシュガード、ライフジャケット、靴にヘルメットで身を固め、宇宙飛行士にでもなった気分バスに乗り、上流のスタートポイントへ移動。



私たちはバタヤン艇とトミー艇に分かれ、うら若い女性や神戸からのカップルと乗り合わせた。ここでは川の流れはゆるく湖水のように静かであり、川底の小石さえはつきり目に映るほど水は清く透けていた。ガイドの掛け声で前漕ぎ、休止、沈み込みなどパドル捌きを繰り返して練習。活動的で愛くるしいトミーはシニアガイドの資格をもつトップガイド、彼女の「漕いで」の一声でいつの間にかスタートした。最初の瀬までは前漕ぎで進み、あっという間にしぶきが

全身にかかり、スリル感と爽快感が同時にやってきた。漕ぎ進んだり、流れに任せて漂流したり、更には沈み込んだりして大小いくつもの瀬を下っていった。瀬を乗り切るたびにやるパドルのハイタッチで気分が一段と盛り上がり、思わず「エイッ」と大声を出したものだ。ラフティング経験者とはいえ、風邪気味で泳げないはずのCZもテンションが上がり、思い切って川に飛び込んだ勇氣は素晴らしい。

トミーはじめ、このガイドたちはお客を楽しませる術を熟知しており、そして私たちは十分に楽しんだ。もう一度やりたい！ラフティングは素晴らしい。



太くて噛み応えのある地元の名物「仙吉そば」を食し、かずら橋を見学したあと、距離の短い旧道を通ってキャンプ場に戻った。道はカーブが多く、急勾配で狭かった。

サイトに車を入れる際、朝日の方角にタープの向きを変えるのに、私はそそっかしくも前輪を側溝に落として脱輪。みんなが寄って何とか脱出させようとジャッキアップして押したり、持ち上げたり試みたけれど溝が深く、思わしくなかった。気分がすっかり落ち込み沈んでいるところへ機械音痴のMTまでもが自車からオイルジャッキを持ってきてくれたのが凄くうれしかった。仲間はありがたいものだ、素晴らしい。いよいよ自力脱出を諦め、保険会社に連絡して待つことにしたが、過疎地に加えて土曜日の午後4時という悪条件のせいか、レッカー手配の連絡がなかなか来ない。大抵の物事に動じないつもりでも、この時ばかりは心細く感じたもの

だった。それでも文句一つ言わない我が女房は素晴らしい。

連絡を待つ間、何とかならないかと再度挑戦することになり、薪を薄く裂き割り、積み重ねて溝をスロープ状に埋め、スリップする後輪にもすべり止めに板状の薪をかませた。RSのアイデアで、4人が車に乗り全体重が後輪に集中するように位置をとり、車をゆすりながら2人が前から押す。そこでタイミングを計りアクセル踏んで一発で脱出させた。頼りになる仲間は素晴らしい。

夕食時になると、前夜に続き涼しく快適な気温になったのはうれしい。前日、今夜の食材を仕入れる予定の大豊SCは過疎のためか廃業して閉店していた。どうなるものかと思ったが、いわしのムニエルに茄子のソテー、野菜炒めに牛肉のステーキ、オクラ・山芋の梅肉合え、しいたけ昆布、ナスの味噌汁、、、、出るわ出るわ、キャンプ歴20余年のキャリアは素晴らしい。

28日朝、手回しミルで豆を挽き、一杯ずつドリップして入れたコーヒの香りにゆとりが感じられ、至福の時間であった。「ここはゆとりすとパークだ」を実感した。それを飲みながらの朝食はまた格別。一段落したところで、恒例のミーティングを始めたが、次回は湖西のビラデスト今津：9月20日開催を確認するのみで、例会と言うよりは、前日のラフティングの思い出話に始終した。体にぴったりするウェットスーツが腰で引っかかり、着用3人がかりで引張り上げたとか、脱ぐときも相当苦労したらしい。記念写真はタープ内で撮り、楽しかった記憶と共に帰途についた。

オートキャンプは、喧噪な都会を離れ大自然に飛び込む最も簡易で軽便な手段の一つである。重い荷物を担いで移動することなく、車をキャンプサイトに横付けし、日常的な営みを非日常的なアウトドア環境の中で楽しむ素晴らしさ。それは一般の旅行とは全く趣きが異なるものだ。オートキャンプは素晴らしい。同好の士はいませんか。

暗記がもたらした実り

文学歴史学科1年 相田 晴夫

「古文の夏休みの宿題は、百人一首の暗記です。9月にテストします」高校一年の7月、先生が言われた。夏休みには、主要学科の補習授業があったから、何のことはない、夏休みに入っても毎日登校した。家から学校まで歩いて30分、往復で一時間、この時間を百人一首の暗記にあてた。15歳の少年には、歌の内容がよくわからないものもあったから、暗記は気の進むものではなかった。しかし百首は暗記した。休み明けの9月、古文のテストは100点のうち60点（二十首）が百人一首から出題された。私は60点部分が57点だった。一首だけ間違えたのだ。こうして百首の暗記がきっかけになって、古文は好きな科目になった。社会人になってからも、古典文学との繋がりはず断れなく続けた。30年ほど経ったある日、百人一首の全首をいまだに諳んじていることに気付いた。

20歳の時、先生の方針により、仲間9人で学校近くの禅寺に籠もり、一週間勉強したことがある。そこで般若心経に出会った。朝、昼、夜の食前に、僧侶が般若心経を読経する。私たちはその声に合わせて、手元の小冊子の文字を追いつながら、般若心経を唱える。お経を一字一字、音読みするだけなので、意味がわからない。家に帰ってから、般若心経の教えが知りたくなり、角川文庫を買い求めて読んだ。「色即是空、空即是色」の考えに心惹かれ、暗記を思い立った。1回目は失敗。何年かが過ぎて、懲りずに2回目に挑戦。またもや頓挫。暗記は無理だと一旦は諦めた。その後、中国語を1年学んだ。本とCDをセットにして売り出される時代になっていた。機は熟したと考え、3度目に挑んだ。本は読み込む、CDは繰り返し聴く。梅田から職場までの徒歩30分を使って、毎朝、暗記した。今回は流れた年月が背中を押してくれたためか、暗記は楽に終わった。母が亡くなった時、僧侶が読むお経の中に般若心経が含まれてい

た。若き日の禅寺に始まる般若心経との関わりが、半世紀を経て、母へのお経に結びついていることに、浅からぬ縁を感じた。

2年前のこと、新聞の囲み記事で「便用謡」を知った。便用謡は、京都に生まれた子供たちが京都の東西と南北の通り名を覚えやすいように作られたもので、東西が29、南北が31、合わせて60の通り名が織り込まれている。東西の通りは、「丸竹夷二押御池（まる、たけ、えべす、に、おし、おいけ）」と始まり、南北は「寺御幸麩屋富柳堺（てら、ごこう、ふや、とみ、やなぎ、さかい）」と歌いだす。通り名の頭の部分が、口調よく取り出されている。興味が湧き、暗記を始めた。昼にはせつせと暗記し、夜には湯船に浸かって口に出した。うろ覚えの個所は、風呂から上がって覚え直した。今年7月、祇園祭の山鉦巡行見物に出かけた。御池通の観覧席で長刀鉦の到着を待ちながら、山鉦の配置場所を確かめようと、パンフレットに眼を遣ったその時、そこに記された通り名すべてが、便用謡に歌われていることに気付いた。私は、京都の通り名が、私の方に歩み寄ってきたような錯覚にとらわれた。京都の街が、私に身近なものに感じられた。

もし、夏休みの宿題に百人一首が選ばれていなかったら、十中八九、私は卒業後も古文への関心を持ち続けることはなかっただろう。園田学園のシニア専修コースを受講することもなかっただろう。私は、暗記がもたらす人生の実りとでも言えるようなものに不思議な思いを抱いている。百人一首は私の心に共鳴した。般若心経も便用謡も、私の心の糸をふるわせた。暗記した事柄が、時の流れの中で、ある日忽然として私の心に鳴り出し、反響して、ささやかな私の人生に実りをもたらしていると思う。

暗記は続けよう。また一つの実りに出会えるように。

「会社人」から「自由人」

情報学科 1年 徳田 将之

昨年(H24)10月末に「会社人」として40数年拘束されたサラリーマン(内、37年間は財閥系総合化学会社とドイツ三大化学メーカーの一社との合弁会社勤務)の日々を終えた。

心待ちにしていた「自由人」の生活ではあったが、その解放感を味わうと共に組織に属する特権の喪失感も複雑に絡み、徐々に不安定な心情のバランスをコントロールする難しさも感じ始め、まさに退職後のサラリーマンが程度の差こそあれ皆等しく体験するのであろう両者の葛藤が始まっていた。

「団塊の世代」と言われ数の多さから数々の社会現象を引き起こしてきた我々世代も新聞やテレビのニュースでは「65歳以上の高齢者」と呼ばれる年代へ突入したが、一方では「余生」とか「老後」という決まり文句で呼ばれることには未だ素直に馴染めない自分がおり、それらの言葉に込められた消極的な定年後の人生を如何に規則正しいリズムで目標を持ちながら充実した「自由人」へ変身・ソフトランディング出来るのか？

定年数年前から漠然と模索していたテーマではあったが小学校から中学校、中学校から高等学校と、大学を卒業し就職するまでは都度それぞれに続くルールは敷かれていたが、問題は退職のあとは？・・・である。

これまで、「濡れ落ち葉」やら「粗大ゴミ」等と邪魔者扱いされたサラリーマンの定年後の生活から脱却できそうな「第2の人生」に見合うものがないものか？・・・と、探していたところ昨年末に西宮市生涯学習情報コーナーに置いてあった「園田学園女子大学・シニア専修コース」のパンフレットが目にとまり、思わず「これだ！」と心の中で叫び、これをひとつの柱にしようと考えた。

その後、調べてみるとこの大学の生涯学習への取り組みは公開講座も含め30年余の歴史があり大変信頼性の高い生涯学習活動事業である

ことにも背中を押され平成25年度4月入学生に申し込んだ。

選んだのは「情報学科」でこれは会社生活も終盤にかかるころにPC(Windows95)を与えられ、その操作が出来ないと仕事にならないという現実もあり必要最小限の知識は習得した(させられた)が、少し複雑な事象が起きるとIT担当者と呼んで解決してもらったことが多かった。

と、いうこともあり退職を機会に益々加速さ



れている情報化社会からデジタルデバイドされないよう会社のIT担当者レベル並みにとはいかないまでも少しでも近づけるよう体系的に勉強してみようと思い立ったわけである。

加えて同じ指向を持つ同世代の色々なキャリアを持つ人たちと学習以外の場でも交流を深めるべく写真倶楽部とテニス同好会に参加させてもらっているが、それが華やかな女子大のキャンパスにあるとなれば何とも楽しいことではないか・・・。

ところで、「団塊の世代」と呼ばれるこの世代、壊し屋世代とも言われ上からも下からも評判はイマイチでこんな戯れ話を聞いたことがある。

「団塊の世代、四つの破壊」という。

ひとつ、大学を破壊した

ひとつ、年功序列制度を破壊した

ひとつ、年金制度を破壊しつつある。

最後は用地難で墓場まで・・・と、ある。

しかし、一説によれば、団塊世代が死に絶えた暁には、年金制度もかなり改善するらしいから、それがせめてもの最後のつぐないとなるのか？・・・どうなることやら、ともあれ「自由人」年金生活者への本格仲間入りは始まったところである。

グランフロント大阪を訪ねて

研究生 水原 剛

7月の中旬、文歴9期生の仲間とグランフロント大阪を訪ねました。前期の授業も終わり長い夏休みに入るの、打ち上げ会の開催です。

2時限の授業を終えて食堂で軽食のあと、阪急電車で一路梅田駅へ。連絡通路を少し歩くとその姿が見えてきました。



ご存知のようにグランフロント大阪は、JR梅田貨物駅跡の再開発エリア「うめきた」の先行開発区域として、今年の4月にオープンしました。大阪最後の一等地と言われる24haの広大な土地の内の7ha分です。大阪駅・梅田駅の乗降客は約240万人といわれ、新宿、池袋に次いで日本で第3位です。その新しい玄関口となりますので、来客数はもの凄いです、その割にはお客さんの売上単価は今ひとつも…。



でも来春にはミナミの「あべのハルカス」も全館オープンします。大阪もキタとミナミが互いに競い合い、更に発展してあの東京にも負けないくらいの(?)…それは無理かな？



たくさんの人の流れに乗って、私たちも館内を散策しました。目新しいお店ばかりなので圧倒されます。人混みの雑踏は若者たちに任せてそろそろシニア組は静かなところに移ります。

大丸の16階にある「ニューミュンヘン」は静寂そのもので、まるで貸切りの状態です。3時限の授業を終えた人、授業のなかった人も続々と顔を揃え、みんなで20名の大盛況となりました。

ワイワイ、ガヤガヤと賑やかで楽しい団らんはいつまでも続きますが、さすがに5時近くになれば、お店の方も周りをゴソゴソ。

それでは今から分散会です。喫茶、カラオケ、居酒屋に分かれてガンガンと。その後も電車を途中下車して、3次会の方もおられたとか。

皆さん、お元気ですね。本当にシニアなのか？感嘆し、尊敬します。

次はココ！「あべのハルカス」



「山上の聖地」

研究生 萩原 善恵

8月2日～4日 第89回高野山夏季大学に参加しました。宿坊は成就院。

南海電鉄難波駅→ケーブルカー→バス→と乗り継いで高野山に到着。

紫陽花が咲き、気温24度の涼しい山の中の学び。会場は800人の受講生の熱気に溢れていました。

朝の勤行、お授戒、写経、山内見学、朝のお大師様の食事「御生身供」拝見。

パワースポットに包まれ心身共に清々しい気持ちになりました。合掌。

講演は、画家上村淳之氏、作家椎名誠氏、写真家織作峰子氏、高野山大学の学長藤田光寛氏、等々…

貴重な体験や深い思いに感激。

そして、女優の有馬稲子さんの朗読と沢村祐司さんの箏演奏は、講演続きで疲れた脳を癒してくれました。

あっという間の3日間でした。

参加者の感想を俳句にしました。紹介いたします。



夏高野会いに来ました大師様
静けさや写経する手に汗滲む
杉木立苔むす墓石十万超

研究生 萩原 善恵

夏季大学昭和話にうなずきて
蓮の花曼荼羅一色高野山
老鶯や奥之院へと誘いて

研究生 赤澤 佳寿子

夏季大学極楽いざなう高野山
青い目も夏の日瞑想高野山
高野山千二百年の生身供

研究生 足立 信子

ケーブルカー聖地へ継ぐ夏木立
座禅組む異国の青年夏高野
夏空に朱色眩しい大伽藍

研究生 白井 八枝子

紫陽花の脇すれすれにケーブルカー
稲子さん夏季大学で朗々と
杉木立朝露浴びて奥之院

研究生 富山 智子

笹竹に蛍すくいて蛙の道
蛍狩り幼き恋の告らす川
冷や酒をかつぎて男円座組む

研究生 浜谷 智恵子

私 と 山

研究生 小西 温代

いつの頃からか山登りをするようになった。

「伊丹市民山の会」に入れてもらって、毎月第3日曜日は山登りに行くことにしていた。朝早く起きて弁当を作り8時30分に阪急伊丹駅に集合、多い時は40人から50人の山友が集まってきたなあ、みんな元気で若かったなあ。

私が最初に山登りを始めたのは1989年の春頃だったかなあ。一番最初は須磨アルプス、ものすごく大変だったことを覚えています。それから4ヶ月目に夏山、7月24日～3泊4日、天神祭りの一番暑い頃に、また冬山は2月10日頃の寒い頃に3泊4日。夏山冬山1年2回の山登り。北アルプスの山々を登り始めた最初の夏山は白山でした。その年の冬山は白馬400mの雪渓を歩いたなあ、みんな楽しかった思い出です。



穂高・立山連峰・新穂高・焼岳・常念岳・野口五郎岳、名前を思い出せないほどいろいろの山に登ったと思います。いつも泊まりはそれぞれの山小屋宿泊施設、といってもお粗末な山小屋、それでもいろいろな人と出逢い楽しく星を眺めながらおしゃべりをしたりしたこと、今もよい思い出になっています。何を好き好んで山登りをしていたのかなあ。45lのリュックサックに4日分の着替えと食べ物を入れたりそこまではまだそんなに重くはなくても、それに水を20、お茶など入れる・・・もう大変、どっと重くなります。

それでも10年ぐらいは行ってたかなあ。夏の暑い時、冬の寒い時、重い荷物を背中にしょってこの苦勞に耐えられればどんなこともできそうに思いましたね。まあ今も第3日曜日は山登りを続けています。



八十に手が届く年になれば3,000m級の山には登れなくなりますが、この間は京都の鞍馬に登ってきました。まあぼつぼつ怪我がない間に止めないと子供達に迷惑をかける様なことになっても困ります。足を鍛える程度の山歩きならよいかなあと思います。山の上のおいしい空気と心地良い風のおいおいに魅せられて元気でおりたいですね。



(上の写真 左から2人目筆者)



マチュピチュ「発見」100年 「インカ帝国展」を鑑賞して 研究生 遠藤 明

駅の広告に「マチュピチュ『発見』100年 インカ帝国展 京都市文化博物館 2013. 4. 16 (火) - 6. 23 (日)」というのがありましたので、過日、6月6日(木)に、出かけました。「マチュピチュ」「インカ帝国」という言葉に魅かれ、それに、「南米」という遠い現地へは、容易に行けるところではありませんので、もうそれだけで、魅力を感じていました。

1. 「インカ帝国」の起こり

南米アンデス地帯に、最初の人間が到達したのは、今から1万2000年ほど前のことと考えられているそうです。洞窟や岩陰、あるいは地面を掘って石をかぶせた、穴倉いけくらのようなところにも暮らし、野生の動植物を食料その他に利用する生活であったといえます。

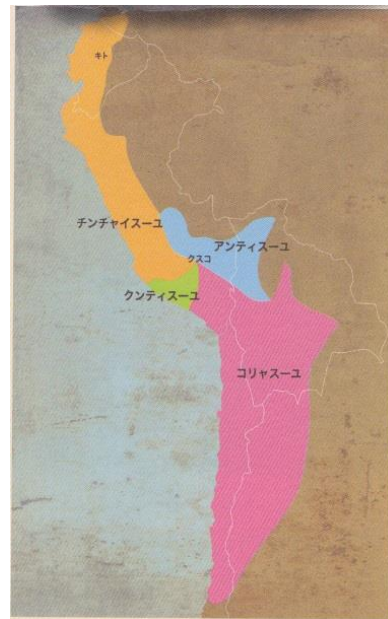
インカの創世神話には、2つの伝説があるそうです。一つは、「万物の創造主であるピラコチャが太陽と月を作り、1日を昼と夜に分け、人間を作って、どのように生きるか教えたというもの」もう一つは、「クスコの東南にパカリクタンボという洞窟があって、インカ帝国の始祖マンコ・カパック王が、その穴から生まれたというもの」です。

紀元前1500年ごろ、土器と綿織物の技術が取り入れられ、農業が主たる生業として確立すると、神殿建築は大規模になり、神官は、宗教だけでなく、政治にリーダーの役割をも担うようになったといえます。

西暦700年頃、絢爛たる地方文化の発展時代が終わり、一時期ワリ様式の土器や織物が普及するが、やがて、1000年頃から各地地方文化が復興するようになったといえます。それを生んだのは、軍事と政治に重きを置いた新しい社会であったといえます。北海岸では、チムール王国が、次第に領土を拡大していき、同じく勢力を広げていた北高地のカハマルカ王国と手を結んだそうです。中部高地では、ワンカ族やチャ

ンカ族が支配的勢力となり、南海岸では、チャンチャ王国が生まれたそうです。中部海岸のパチャカマックは、その名高い神託がアンデス中から多くの巡礼を呼び寄せる都市として繁栄したといえます。その少し北には、チャンカイ文化が広がっていたそうです。

こうした大小の国家が、友好的あるいは敵対的關係にあった中から、クスコ地方のインカ族が台頭し、14世紀の中ごろから征服国家の道を取り始め、異常ともいえる速度で諸民族を帰属させ、従来の中央アンデス文化の領域を越えて北と南に領土を拡大し、強大なインカ帝国を建設したといえます。クスコは、ケチュア語(ラテンアメリカーインディアン語ケチュマラ大語族に属する言語、コロンビア南部・ペルー・エクアドル・ボリビア・アルゼンチン・チリに分布する。)で、「へそ」という意味で、インカ帝国の中心となる都市であり、太陽神の神殿が祀られた精神的中心でもあったといえます。



そして、インカ帝国が急激な発展を遂げるのは、15世紀前半に登場した第9代王パチャクティの統治期だそうです。

人口は、1,000万人を要し、現在のペルー、ボリビアおよび北アルゼンチンを含み、

北は、現在のエクアドル、コロンビア、南は、チリ中部まで、広大な地域と民族を統合し、大帝国の礎いしづえを作り上げたというわけです。

さらに、首都「クスコ」は、各地方を結ぶ道路網「インカ道」が張り巡らされていたそうです。インカ帝国の人は、文字も持たず、車輪も知らず、鉄器もなく、自然と共に暮らしていたといえます。

クスコの市街は、海拔3500チリの高原にあり、

1533年、ピサロに征服されるまで、インカ帝国の首都として繁栄、1983年、世界文化遺産に登録されたそうです。

2. インカの人々の生活模様

① **主食** ジャガイモやトウモロコシを主な作物として、アンデス高原地帯を中心に農耕と牧畜を行っていたようです。ジャガイモは、標高2300～4000^{メートル}という高地で、トウモロコシは、比較的温暖な低地で栽培されていたようです。ジャガイモは、色も形も種類が多く、高さと気候に合わせて、いろいろな種類ができ、現在では、数千種以上もあるといわれています。

「チューニョ」と呼ばれる乾燥ジャガイモは、高地のインカの人々にとって、大切な主食の一つだそうです。その作り方は、高地の寒暖差の激しい自然環境を利用したもの。「ジャガイモを野原に広げ、夜の寒気にさらして凍らせる。昼間には、気温が上がって解凍される。これを数日繰り返すと、イモは水っぽく柔らかくなる。これを集めて足で踏んづけ、水分を抜く。そうした上で、また野原に広げ放置しておく。数日で乾燥したイモは、長期保存可能な『チューニョ』になるそうです。

② **主食外的食物** ジャガイモをはじめ、トマト、唐辛子、ピーナッツ、インゲン豆、南瓜、など。これらは、アンデスの大地で生まれたもの。正に世界の食料庫だったといえましょう。

海岸では、海藻を採取したり、魚を獲ったりして、時には、保存用に乾燥させていたそうです。

③ **チチャ（酒）** チチャと呼ばれるお酒は、トウモロコシが原料。トウモロコシを発酵させてつくるそうですが、かつては、女性たちが、トウモロコシを口でかみつぶし、唾液の酵素を利用して発酵させる「口噛み酒」だったようで、チチャは、お祭りや宗教的な行事の際に神にささげられた非常に重要な飲み物だったそうです。

④ **クイ（テンジクネズミ）** （食肉用）クイ（テンジクネズミ）は、モルモットの仲間ですが、インカの家庭では、食肉用として家

畜化されていたそうです。家の中で放し飼いにされ、残飯などを餌としていたそうです。その肉の味は、鶏のもも肉に似ているといわれています。重要な蛋白源として重宝されていたそうです。

⑤ **家畜** アンデスには、リャマ、アルパカ、ビクーニャ、グアナコの4種類のラクダ科の動物が生育していて、リャマは、主に荷役。そして、毛や肉も利用されていたようです。アルパカは、毛を採取し織物に。ビクーニャの毛も、最高級の織物になったようです。グアナコも、肉、皮、毛を利用したといえます。

リャマとアルパカは、主に家畜として飼育され、ビクーニャとグアナコは、野生のままだそうです。リャマは、体高約1.2^{メートル}、体長約2.2^{メートル}、体重70～140kg、姿はラクダに似ているが、背中にコブはなく、全身が、柔らかな毛で覆われていて、まつ毛が長く、目はパッチリとし、おとなしい性格で人に慣れやすいといえます。家畜、荷物の運搬用、毛や皮の利用等のほかに、肉は乾燥され、チャルキと呼ばれる保存食にもなったそうです。ビーフジャーキーの「ジャーキー」（乾燥肉）の語源だといえます。重要な儀式の際には、リャマの心臓が生贄としてささげられたといえます。

⑥ **コルカ（倉庫）** コルカと呼ばれる倉庫には、ジャガイモやトウモロコシや干した果物等の他に、毛布、羊毛、武器、金属器、衣類、道具類などが大量に保存されていたそうです。コルカは、窓や床下から高地の冷たい空気を取り入れる構造になっていて、食糧を、カビや腐敗から守り、保存性を高める工夫がほどこされていたそうです。正に天然の冷蔵庫だったといえましょう。

⑦ **ファッション** 男性は、腰に褌（ふんどし）を巻き、一枚の布の中央部に穴を開けて頭を通すポンチョ（貫頭衣、古代の弥生時代に似たような服）を着て、リャマの皮で作ったサンダルを履（は）くというのが伝統的なファッションだそうです。一方女性は、アルパカやリャマの毛で織（お）った布をスカートのように腰に巻き、

模様を織り込んだ腰帯で結んでいたといひます。上半身は、長いマントで覆い、胸のところ



を銅や銀の「トゥプ」と呼ばれるピンでとめるのがおしゃれのポイントといひます。時には、腕輪や首飾りなども付けていたそうです。

⑧ **インカの織物** インカの織物は、刺繍、縫い取り、つづれ織り、レース織りといった高度の技術を駆使し、さまざまな色と形が組み合わされ、複雑な幾何学的模様が織り上げられているそうです。染色の技術にも優れ、植物や鉱物からとった染料で染められていたといひます。このほか、珍しいのは、コチニールカイガラムシという虫を利用したものでして、この虫からは、鮮血の様な真っ赤な染料がとれるそうです。高級な織物は、非常に価値が高く、富の象徴でもあったといひます。

⑨ **楽器** アンデスを代表する楽器は、笛（ケーナ、葦や動物の骨を使ったたて笛）とアンタラ（パンパイプ、長さの異なった陶製の筒や葦の茎を横に並べたもの）の2種類です。長さの違いで、音階ができるわけです。弦楽器は、なかったそうです。

⑩ **「二つが一緒」は、密接な絆を表現**

「2個」は、等しいサイズと同じ形、同じ材質で出来ているものでなければならないといひます。それは、男と女、右と左、上と下など、お互いに対立しているけれど、片方なしには、もう片方もあり得ないということを表現したものだといわれています。「二つが一緒」が、最も安

定していて、密接な絆を表現していると考えられているそうです。



⑪ アンデネスの工夫（段々畑）

4,000m以上の標高差を利用して、雨水を有効に活用し、泉や川の水を効率的に利用するため、水路を引くことに特別な情熱を注いだといひます。この時代の建造物は、石を使って精巧に作られていますが、その技術は、灌漑用の水路づくりにも生かされ、現代の上下水道施設にも劣らないほどのインカ独自の水路施設を作り上げたそうです。

⑫ **貨幣がなかった** インカ帝国では、人々は、お金を持たなかったそうです。親兄弟、親戚などを中心とした「アイユ」と呼ばれる親族組織・共同体を軸として、相互の協力により、さまざまな高度差の環境に広がる多種多様な産物（塩とジャガイモの物々交換など）にアクセスすることができたそうです。

⑬ **「ミイラ」も家族の一員** インカ帝国には、死後もミイラとして生き続けるというミイラ信仰があったそうです。いつまでも子孫を守ってくれると考えたのでしょう。

亡骸の頭髮を切り取り、皮膚をなめすように磨いた後、折り畳むようにして綿布にくるみ、埋葬する地方もあったそうです。また、ある地方では、ミイラを家の中に置き、衣服を着せ替え食事を与えるなど、まるで生きている家族の一員のようにして暮らしていたといひます。

1995年9月、ペルー南部にあるアンパト山（標高約6300m）山頂近くの雪の中から、インカ時代の少女のミイラが発見されたそうです。少女は14歳ぐらいで、身長は、147cmほど、座ったまま両膝を胸に引き寄せるような格好で、小さな包みの中にくるまれていたといひます。体の

大部分が、雪に埋もれていたもので、保存状態はよく、500年も昔のミイラとは思えないほど。太陽神や高山に住む霊的存在に対して、生贄として幼い子どもたちがささげられたといえます。

⑭ **脳外科手術** ミイラの頭蓋骨に、手術跡のあるものが見つかっています。脳外科手術の技術は、とても進んでいたそうです。開頭手術は、インカで古くから行なわれ、手術の道具として初期には黒曜石を鋭く削った小刀、後期には銅や青銅のナイフが使われたといえます。

⑮ **剃刀の刃も入らない石組みの技** インカの宮殿跡や神殿跡の石組みは、剃刀の刃一枚も通さない精緻さで実に整然と組み上げられているといえます。石工の道具としては、石のハンマーや斧、青銅の鑿や鑿などです。石を割る時は木の楔を差し込み、水を与え、木の膨張を利用するそうです。そのあと、石のハンマーや鑿で形を整え、石と石がぴったり収まるように砂で磨き上げたといえます。

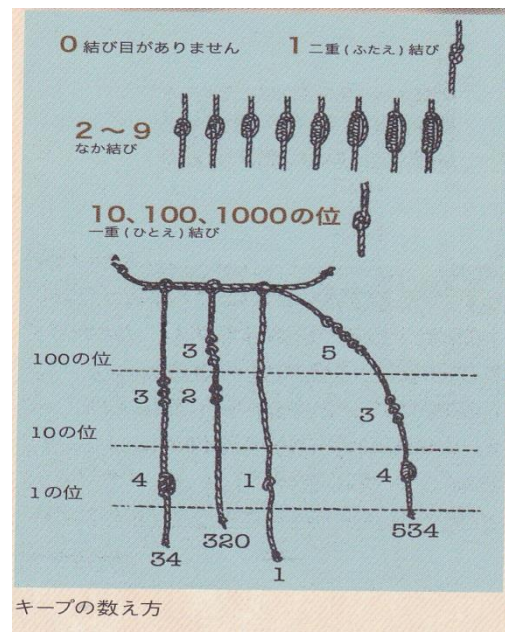
石を運ぶ時は、下に丸太を並べ、その上を滑らせるように、人力でロープを引くそうです。

重い石を上まで上げるときも、滑車はありませんから、土を盛って坂道を作り、そこを引きずって持ち上げたそうです。

⑯ **「キープ（結節縄）」** 文字を持たなかったインカの人々は、情報伝達手段として、リヤマの毛などで編まれた「キープ（結節縄）」と呼ばれる記憶補助道具を考案し、活用されていたといえます。ちょうど「縄のれん」のように多数の縄がぶら下がる構造で、ぶら下がった縄には、結び目が作られるわけです。この縄の色や結び目、長さの違いによって、数字やその他の情報を表現していたそうです。

「縄に1から9までの数字を表現する結び目を作り、結び目の位置によって、1の位、10の位、100の位というように位取りがなされる」わけわけです。また、文字の代わりに、人口、家畜の種類と数、作物の量、軍隊の兵力などをはじめとする統計的なデータも記憶されたそうです。

一方、「キープカマヨク（キープの管理人）」と呼ばれるプロフェッショナルも存在したそうです。



3. インカ帝国・征服される

スペインの探検家フランシスコ・ピサロが、南米各地を探検し、1533年、インカ帝国に侵入し、虐殺と略奪によって、これを滅ぼしたといえます。

「1532年、11月16日の夕刻、160人余りの部下を引き連れたピサロは、ペルー北高地にあるカハマルカの町にいた。この地に滞在していたアタワルパ王と会うために。ピサロ軍に同行していた修道士が、王のもとに派遣され、輿に乗ったアタワルパに語りかけ、祈祷書を開いて、キリスト教について説いた。アタワルパが見せてくれと言うので渡すと、手に取ったもののそれが、何かわからずイライラして放り投げてしまった。許しがたい神への冒とくだ！！ピサロは、インカ軍への総攻撃を命ずる。たった160人ほどとはいえ、インカにはなかった鉄製の刀剣や槍、銃や大砲などで武装した騎兵は、またたく間にインカ兵を虐殺し、アタワルパを捕らえてしまう。」

この点を、別の角度から見ますと、

「アタワルパは、ドミニコ会修道士ビセンテ・デ・バルベルデが、ピサロの命を受け、片手に

十字架、片手に聖書を振りかざしながら、前に進み出て、『私は、あなたに、神の言葉を伝えるに来了』ということを行います。アタワルパは、聖書を掴むと、耳に当て、それから、「何も聞こえてこない」とつぶやき、聖書を地面に放り投げたそうです。突然のことで、皇帝は、名誉を傷付けられ、辺りは大混乱となり、広場は、死体で埋め尽くされたといひます。」

インカ帝国最後の皇帝、アタワルパは、フランシスコ・ピサロに捕らえられ、処刑されることになります。

こうしてインカ帝国は、1533年、滅亡していったのです。

4. マチュピチュ発見

1911年7月24日、アメリカ人探検家、ハイラム・ビンガムは、マチュピチュを発見したのです。

クスコの北西、ウルバンバ川の谷を下って行くと、マチュピチュ峰（標高3050m）と、ワイナピチュ峰（標高2720m）の影に身を隠すように築かれている「マチュピチュ」遺跡に出会ったといひます。

「目の前に広がる光景に、ビンガムは、それまでの苦労がすべて報われる思いだった。天然の要塞の上に建てられた壮麗なマチュピチュ、その遺跡の中に、ビンガムが足を踏み入れると、道路や階段、建造物、神殿、家屋、すばらしい景色が、目の前に広がった。正面には、ワイナ・ピチュの尖峰が聳え、そこにも遺跡が立ち並んでいた」（『知の再発見双書』06 『インカ帝国—太陽と黄金の民族』カルメン・ベルナン著 株式会社 創元社 P. 126）

遺跡の発見だけではなく、彼は、「独特の調和を醸し出している石造建築の見事なできばえ」

「これほど巨大な石をこれほど美しく組み合わせた建造物はない」と、その点も発見したのです。正に天空に浮かぶ都市そのものといえます。

「突然、何の前ぶれもなく、ガイドの少年は、突き出た大きな岩棚の下を指差した。洞窟にとつともなく大きな石を巧妙にかぶせてあった。王家の霊廟だ。その見事な岩棚の上に緩やかな

カーブを描く外壁のある半円形の建造物がそそり立っていた。それは、あの有名なクスコの太陽神殿に驚くほど似ている。おそらくそれも同じような太陽神殿なのだろう。神殿は、岩山の描く自然な線に沿って立っており、これまで見たこともないような、巧妙な石積みの技術を用いて組み合わされている」と。



5. 古代インカ帝国文化に感動して

インカ帝国の祖先にあたる人は、1万2千年ほど前から南米に住んでいたことに驚きました。ポンチョ（貫頭衣）を身にまとい、しかも、その模様は、幾何学的な模様で織り上げられているそうです。「二つが一緒」という発想は、最も安定していると言う点から起こってきているといひます。鉄器もなく、文字もないのに、石積みの技術は、すばらしいものです。しかし、「キープ（結節縄）」の長さの違いから、数や量を表現する考え方を持っていたといひます。ミイラ信仰には、驚きました。しかし、命が途絶えているけれども、いつまでも一緒に生活したいという願いを持つことは、どの時代を生きる人も同じなのだなあと思いました。

改めて、インカ文明の素晴らしさに感動しました。

[参考図書]

- ・『インカの謎が、やってくる』
インカ帝国展公式ガイドブック
網野徹哉（東大）2012
- ・『知の再発見双書』06
『インカ帝国—太陽と黄金の民族』
カルメン・ベルナン著 創元社

（終わり）

総合生涯学習センター からのお知らせ

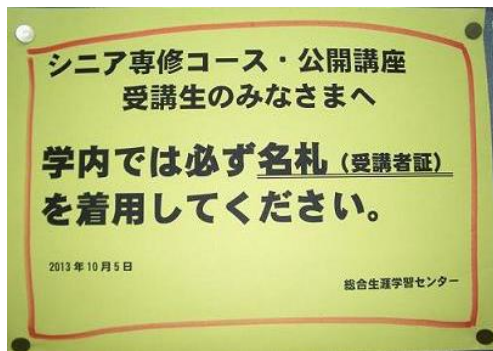
1. 「園田・みんぱく連携講座」

履修登録について

1月24日から開講される「園田・みんぱく連携講座」は、今年度初めて企画された半期科目扱いの集中講義です。実際にみんぱく（国立民族学博物館）を見学する日もあります（授業案内参照）。国際文化学科の方はもちろん、選択科目なので、どの学科の方も研究生の方も受講できます。履修登録締め切りは12月20日（金）です。総合生涯学習センターで履修登録して下さい。

2. 名札着用のお願い

年度初めには毎年お願いしていますが、学内では必ず名札（受講証）を着用して下さい。学外での授業の時にも着用して下さい。紛失された場合は再発行できますが、500円必要ですのでよろしくお願いいたします。



3. 研究生ファイルについて

研究生のみなさんには個々にファイルがあります。お配りしたいものがあるときは掲示します。センター入り口のカウンターに置いていますので、見に来て下さい。特に、受講証（名札）は毎年更新ですので、必ず交換に来てください。

4. 卒業式のご案内

平成25年度の卒業式は、平成26年3月14日（金）の予定です。3年生のみなさまは万障お繰り合わせの上ご出席下さい。在学生・研究生の方々もご出席いただくことができます。

5. 平成26年度「シニア専修コース」

募集について

平成26年度の「シニア専修コース募集案内」は11月下旬にはできあがる予定です。それまでも、ご家族・お友達で資料請求やご見学等ご希望の方がいましたら、総合生涯学習センターへお知らせください。

6. 公開講座受講について

冬季特別講座など、これからもお申し込みいただける講座があります。シニア専修コースのみなさまは、登録料不要、受講料のみで受講していただけます。決まり次第、掲示等でご案内しますので、よろしくお願いいたします。

7. ホームページについて

総合生涯学習センターのホームページにシニア専修コースのクラブ紹介を掲載する予定です。新着情報で「けやき便り第8号」と「けやき写真倶楽部」を掲載しています！

8. 年末年始の業務について

12月28日（土）～1月5日（日）はお休みです。



研究生ファイルは総合生涯学習センター 入口右側です

「けやき便り」の投稿について

1. 「けやき便り」は、原則として「MS明朝体」「12ポイント」のフォントを使います。
(もし上記と異なる場合はご相談ください。)

2. 原稿について

①データでいただく場合

ファイルのまま頂くとありがたいです。
ワード2段組の入力用原稿ファイルも用意いたしますので、お近くの編集クラブ員にご相談下さい。

(原稿ファイルはMS明朝12ポイントで21列x40行の2段組)

原稿印刷時のスタイルが把握でき便利です。
メモリー等でいただいた場合は、使用後速やかにお返しいたします。
送付先アドレスはセンター掲示板を見ていただくか、お近くの編集クラブ員にお尋ねください。

②パソコンでプリントされる場合

プリントされた用紙をご提出ください。

③原稿用紙でいただく場合

できれば市販の原稿用紙をお使い下さい。
無理な場合は他の用紙でも結構です。

3. 次の内容を含む投稿はお断りします。

- ① 宗教・政治に関するもの
- ② 公序良俗に反するもの
- ③ 一般常識の範囲を大きく逸脱していて、
「けやき便り」編集グループが、掲載することを不可と判断したもの

4. 原稿は止むを得ない場合に限り変更・修正をすることがありますのでご了承ください。

- ① 紙面のレイアウトを整えるため
- ② 編集グループで気がついた明らかな誤記や不適切な表現を避けるため

5. 頂いた原稿は、編集およびページ数の関係上、最新号に掲載できない場合があります。
また、原稿は返却いたしかねますので、ご了承ください。

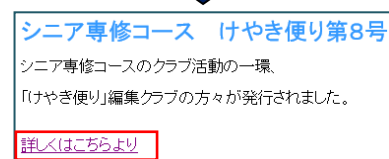
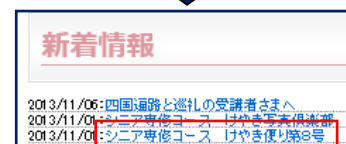
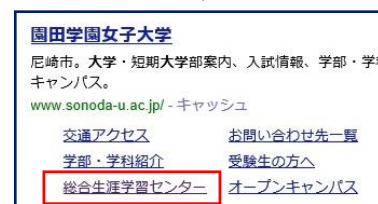
6. 投稿される方は極力お名前を書いていただきますようお願いいたします。無名・匿名・ペンネーム等のご遠慮ください。

7. 画像を掲載する時、カラー画像を頂いても、白黒印刷に変換して掲載しますのでご了承ください。

8. 投稿は2号館1階にある総合生涯学習センターに設置してある「けやき便り」投稿箱にお願いします。



*総合生涯学習センターホームページで
「けやき便り」が見られるようになりました！



今後はすべての号が見られるようになる予定です。

編集後記

平成22年10月1日に「けやき便り」創刊号を発行してから3年が経過した。少し前に、ある人から「けやき便り」のホームページ化を提案され、また総合生涯学習センター様のご好意により「けやき便り」全号のホームページ化が今年中に実施される。「石の上にも三年」というが、投稿者、読者、総合生涯学習センターおよびスタッフのお蔭で3年が経過し、ホームページもできる。私にとって望外の喜びであるが、この喜びは、8号発行前にお亡くなりになった前編集長故柳田様とともに分かち合いたい。

そして、「けやき便り」の三年間を支えて頂いた皆様方に心からお礼を申し上げます。(Y. N)

9号ではそれぞれの努力が結集され、特に新しいメンバーの力によって今後の展望が大きく開かれたようです。やはりなにごとにも変わっていくには、こうでなければと実感させられた有意義な2ヶ月でした。(S. K)

新入部員として2回目の編集に携わることが出来て幸いです。これまで社会人して、大いに活躍された方々と等しく一緒に学び、時にはクラブで語らい作業を行ったり原稿をいただくということはとても楽しみです。(K. T)

園田女子大学創立50周年おめでとうございます！ご縁あって園田の門をくぐり、たくさんの素晴らしい出逢いと学びの場が与えられ、日々の生きる活力となっています。編集に携わらせて頂き、より多くの方々の人生を垣間見させて頂き感謝です。(R. I)

このたび、大学のHPから、「けやき便り」を見ていただけるようになったのは、とてもうれしいことです。お友だちにも、ぜひお知らせください。また、一緒に編集作業をしてくださる方の入部をお待ちしています。(H. M)

パソコンの全てが知りたくて情報学科に入った私です。当然パソコンでの編集の方法にも大変興味があり入部しました。まだ、勉強させていただくばかりで力にはなっていませんが、出来上がった原稿の製本作業の時は感激と感謝の気持ちでいっぱいです。(N. T)

今回の「けやき便り」9号は原稿を依頼した方でパソコンが出来る方には原稿を「けやき便り」の原型に入力して提出して頂き、とても感謝の気持ちでいっぱいです。また、新入部員の方たちには新風を入れてもらい編集クラブが少しずつ変わっていく予感を感じました。(Y. H)

今回多くの方よりバラエティに富んだ原稿を頂き素敵なかやき便りを発刊できました。編集会議の後の食事会やカラオケばかり楽しんであまりお手伝いできず心苦しく思っています。

けやきクラブに入って他の学部の方々とも交流ができより充実した学園生活を送れるようになりました。感謝！！(F. K & E. S)

えっ！編集後記を？ 名ばかりでな～んにもしていない私に忘れず声をかけてくださる事に感謝して、編集に携わっておられる方々の素晴らしい努力に敬意を表します！！(T. N)

編集委員の一人として本号では、初めて原稿の募集から編集、校正までを担当しました。原稿募集では1年生の方からの自由投稿を期待していたのですが、数名の方から素晴らしい投稿を頂き感謝しています。今後もいろんな方が投稿され、より多くの人に親しんで読んで頂けるような「けやき便り」作りができればと願っています。(T. T)